

参加する漁業地域づくり

Projects intended to stimulate the fishery region by local residents

林 浩志

Hiroshi HAYASHI

(財) 漁港漁場漁村技術研究所 海とくらし情報室 主任研究員

The town development by residents participation is in progress all over the country. Above all, town development by workshop is very popular. In planning of the fishery region, the regional development has been promoted through residents round-table conference or direct talks with residents. Recently, many people leave the fishery in the fishery region and regional society with the fishery as a key industry brings about structural change and also value judgment of the residents diversifies.

This study clarifies the subjects or points at issue in case of a trial workshop in the fishery region facing with turning point and the ideal plan toward workshop in the fishing community region.

Key Words : fishery region development , resident participation , workshop

1. はじめに

近年、都市計画や地域計画(まちづくり)などで、従来の手法とは違った住民参加型の計画が広がってきている。そして、この参加するまちづくり手法の一つとして、ワークショップという言葉が盛んに聞かれる。

これまで、漁業地域の計画(地域づくり)においても住民懇談会により、地域住民との直接対話を通じて地域づくりを行ってきた。

しかし、現在の漁業地域は、多くの人々が漁業を離れ、高齢化が進み、漁業を中心とした地域社会に変化をもたらすとともに、地域住民の価値観も多様化してきている。

本論文は、転換期を迎えた漁業地域の地域づくりをワークショップで行った場合、その問題点・課題、そして、そのあり方について実例を基に報告するものである。

2. 地域の概況

漁業地域づくりワークショップを行った地域は、伊豆半島の最南端、南伊豆町の西側に位置する妻良、東子浦、西子浦地区である。各地区は、駿河湾に面した入り江に沿って高密度な集落が形成され、周囲に山が迫った純漁村型集落である。

この入り江は、天然の良港として、江戸時代は上方と江戸を結ぶ海運の寄港地であり、千石船の風待港として海路の宿場として賑わっていたところである。

現在では、妻良、東・西子浦に漁港施設が整備され、入り江全体が妻良漁港として、旧来からの避難、沿岸漁業の基地として、その役割を担っている。

地域づくりは、妻良地区での漁業集落環境施設整備事

業による漁業集落排水施設整備を契機として、入り江に沿った3地区が一体なり、住民参画のもと地域の特性を活かした個性ある地域を目指して計画されたものである。

なお、これらの地区は、昭和56年から「漁村宿泊・漁業体験学習」をテーマに中学校の修学旅行を積極的に受け入れ、漁村体験学習旅行の先駆的な役割を果たしてきたところである。

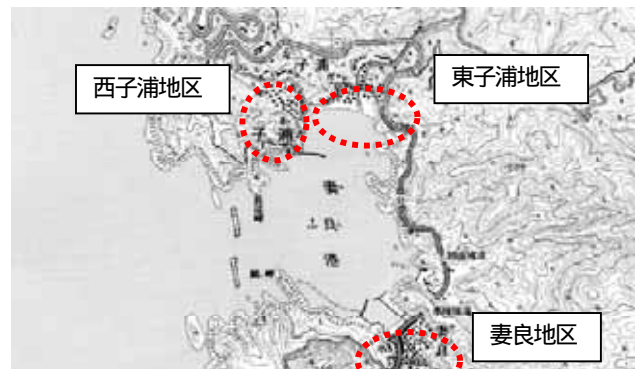


図-1 位置図

(国土地理院発行1:25,000地形図石廊崎、伊豆松崎より)

2.1 妻良地区

妻良地区は、入り江の南側に位置する磯根漁業(イセエビなど)を主体とした漁業地区である。地区人口は、男性142人、女性166人、計308人で、60歳以上が151人と全体の49%を占め、高齢化が進んでいる。(高齢化率を求める場合、65歳以上であるが、ここでは統計資料の区分から目安として60歳以上とした。)

2.2 東子浦地区

東子浦地区は、入り江の北東に位置し、妻良・西子浦

地区とは違い、漁業者が少なく会員の占める割合が多いところである。地区人口は、男性 75 人、女性 83 人、計 158 人で、60 歳以上が 62 人と全体の 39%となっている。現在、妻良地区とは国道 136 号で結ばれ車で十数分の距離であるが、江戸時代は妻良と子浦は同じ入り江にありながら、陸路は七坂八坂の険しい坂に遮られ「妻良の七坂、子浦の八坂、西洋普請でこわしたい」と謡われたほどである。

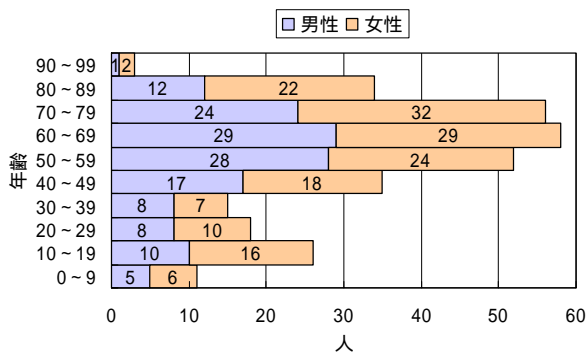


図-2 妻良地区の人口（平成 15 年 1 月 1 日）

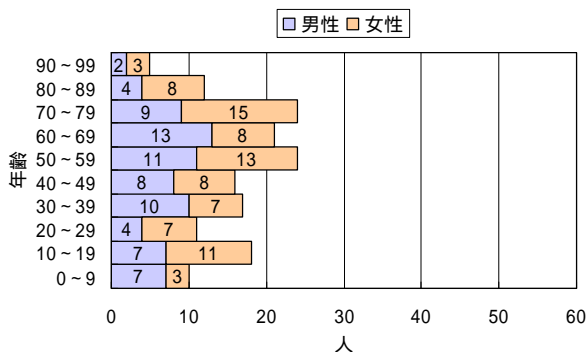


図-3 東子浦地区の人口（平成 15 年 1 月 1 日）

2.3 西子浦地区

西子浦地区は、入り江の北西に位置する沿岸漁業を主体とした漁業地区である。地区人口は、男性 128 人、女性 124 人、計 252 人で、60 歳以上が 122 人と全体の 49%を占め、妻良地区と同様に高齢化が進んでいる。なお、西子浦にある西林寺は、幕末、第 14 代将軍徳川家茂が、江戸から海路を上洛の途中、強い西風を避けるため 2 泊したことで知られている。

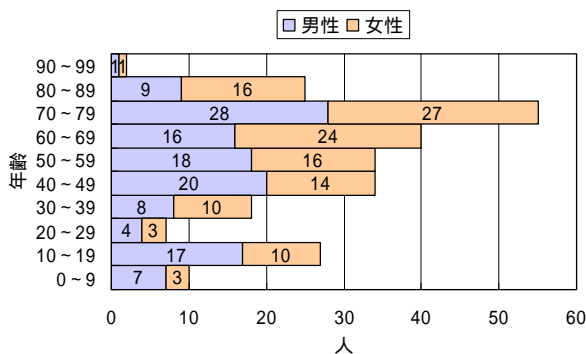


図-4 西子浦地区の人口（平成 15 年 1 月 1 日）

3. 住民参加の地域づくり

3.1 地域づくりとは

地域づくりという言葉が使われ始めて長い時間が経過している。言葉の響きが良く使いやすいのか、さまざまな場で使われている。しかし、その言葉が意味することについては、意外と曖昧で理解されていない場合が多い。また、社会経済状況が大きく変化した現在において、人々の価値観も多様化している。

そのため、地域が成り立っていくには、地域の価値を見出すような地域づくりが必要となる。

宮口は、その言葉が意味するものとして、新しい産業の育成、生活基盤の整備、人々を包む地域社会の新しい価値づくりとしている¹⁾。

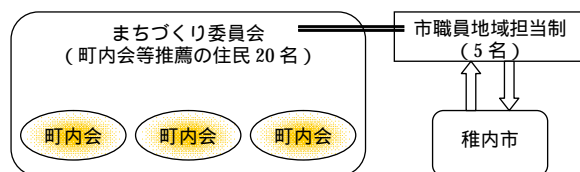
一方、まちづくりの観点から、日本建築学会では、「まちづくりとは、地域社会に存在する資源を基礎として、多様な主体が連携・協力して、身近な住居環境を斬新的に改善し、まちの活力と魅力を高め、生活の質の向上を実現するための一連の持続的な活動である。」²⁾と定義している。

そして、「地域づくりは人づくり」、「地域づくりは人づくりに始まり人づくりに終わる」と言われるように、地域社会の新しい価値づくりは、地域の人が必要であり、地域を担う人材の育成も重要なことである。

したがって、行き詰まりつつある現在の社会状況において、地域づくりは、新しい産業の育成、生活基盤の整備、地域社会の新しい価値づくりであり、これらを実現し成長していくための人材の育成と一連となった持続的な活動であると考えられる。

3.2 参加する地域づくり

地域住民が参加する地域づくりには、さまざまな形態がとられている。図-5 に北海道稚内市、図-6 に三重県嬉野町の事例を示す。稚内市では、中学校区を基準に 14 のゾーンに分け、ゾーンごとに「まちづくり委員会」を設置して、地域住民と行政が一体となったまちづくりである。特徴的なことは、ゾーンごとに市職員を各 4 名担当させた地域担当制である。



市内を 14 のゾーンに分け、それぞれのまちづくり委員会と市職員による地域担当制を導入

図-5 北海道稚内市のまちづくり組織図³⁾

三重県嬉野町の場合は、各自治会が申請する地域づくりに対して、新規事業、持続性、地域住民の総意と言った条件を満足すれば、嬉野町が補助するもので、その後、各自治会から選ばれた住民で構成される「地域づくり委員会」が申請し、住民の代表や町外の学識経験者からなる「嬉野町地域振興推進委員会」が審査をし、町長が承認する形となっている。

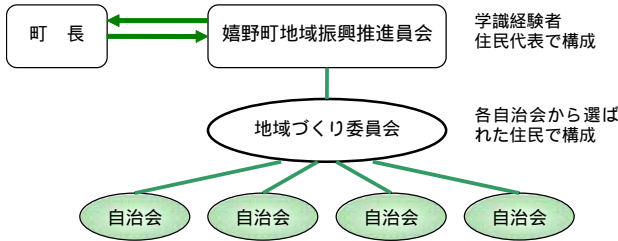


図-6 三重県嬉野町の地域づくり組織図³⁾

このように、住民参加の地域づくりは、さまざまな形態がとられているが、基本的には図-7 に示すように、住民と行政であり、住民ひとりひとりでは限界があるので、自治会や町内会、新たな住民組織などが結成され、この「地域づくり組織」が行政と協働で地域づくりが実現される。また、地域づくり組織と行政の間には、情報や専門知識の格差が生じるため、専門的な能力を有する支援組織が必要となってくる。

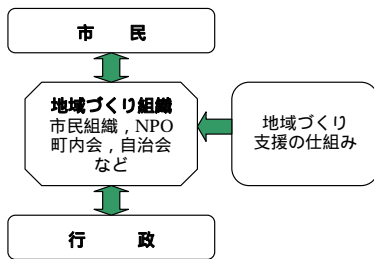


図-7 地域づくりの体制²⁾

3.3 参加する地域づくりのデザイン

住民が参加する地域づくりでは、誰でも最初から自由な雰囲気の中で発言でき、しかも限られた時間内で成果を生み出さなければならない。このような場をどのようにつくるかが重要であり、この場づくりが「参加のデザイン」である。

参加のプロセスデザイン（全体の進め方）

計画や設計作業には、条件整理、情報収集、調査解析、目標設定、計画案作成、計画案評価、計画案決定などの思考プロセスが含まれる。参加のデザインとは、個々のプロジェクトにおける計画や設計作業をどのような思考プロセスにより進めるか、そして、そのプロセスの中に、どのような住民参加の場を設けるか構想することである。

参加のプログラムデザイン（集まりの進め方）

プログラムデザインは、個々の集まりの進め方の検

討のことである。個々の集まりは、規模も目的もさまざま、形式も会議形式からワークショップまで、多種多様である。それぞれの目的や状況に対応した適切な形式と進め方を考える必要がある。

参加形態のデザイン

参加形態のデザインとは、誰に参加してもらうか、どのように集まってもらうかを検討することである。多様な意見や見方ができるような構成が基本であり、年齢、男女、職業など幅広く参加者を募ることが望ましい。そして、集め方は参加しやすい日時、場所はもちろんのこと、集まりの知らせ方も重要になってくる。

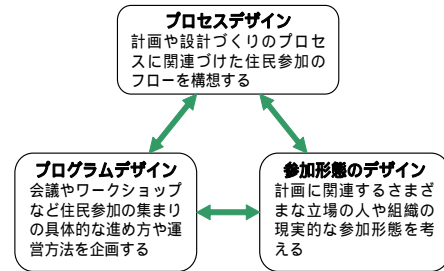


図-8 参加のデザイン⁴⁾

4. 地域づくりワークショップ

近年、地域づくりワークショップが盛んである。

ワークショップは、地域づくりに限られたものではなく、演劇、美術、研修、教育、学習、精神世界など、さまざまな分野で行われている。

ところで、ワークショップとは何であろうか。中野は「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して協働で何かを学びあったり作り出したりする学びと創造のスタイル」⁵⁾をワークショップとしている。

つまり、地域づくりワークショップは、現状のままではこの地域がどうなるのか、そして、地域が成り立っていくためにはどうすればよいのか、その問題点や課題は、解決策（計画案）は、それを実践して行くには（行動、継続、人材育成）など、年齢や社会的立場にとらわれることなく、水平的な関係で話し合い、ともに学び、創造的に解決していく場と言える。

図-9 に世田谷区まちづくりセンターによるワークショップの手法を示す。

4.1 ワークショップの失敗

妻良・東子浦・西子浦地区での地域づくりは、入り江に沿った3地区が一体となって、生活基盤の整備とともに、新たな価値づくりを考える場としてワークショップ（以下WSとする）を開催した。

WSの開催にあたっては、事前に各地域でWSについて、参加者の募集などの説明会を開き、その後、3地区

の参加者によるWSを開催していく予定であった。

事前の説明会では、各地区とも主旨を理解し、自治会を通じて参加者を募集するとのことであった。

しかし、WSを開催したところ、各地区とも出席者はほとんどが自治会の役員で、そして、WSの進行とともに意見が対立し始め、また、計画については「自分たちが考えて創り出す」ことよりも、「計画を創って持ってこい」との考えであった。

このことは、事前の説明が不十分でWSを理解されていない、各地区とも社会・経済的背景が異なる（妻良は入り江の磯根を主とした漁業集落、東子浦は漁業者が少ない集落、西子浦は沿岸漁業を主とする集落）、また、

これまでの事業が住民説明会形式（計画図を提示し意見を聴取する）であったことが主な原因である。

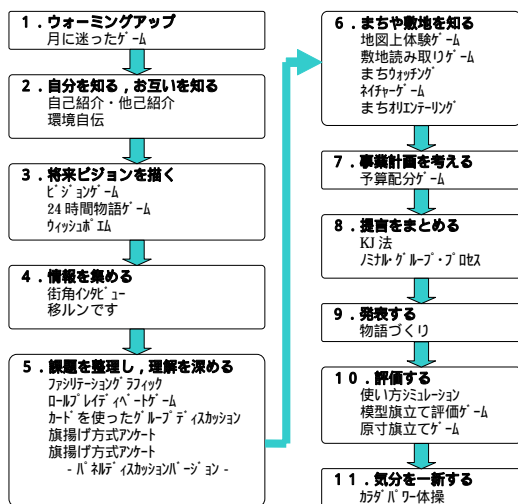


図-9 ワークショップ手法⁴⁾

4.2 ふたたびワークショップ

事実上、WSは初期の段階で躓き、このまま続けることが無理となった。そこで、これまでの事業説明会形式から自分たちで創り出す地域へ、各地区の独自性と共同作業など、WSプロセスを再検討し、ワークショップを行うこととした。

まず始めに、地域づくりへの理解と関心を深めるため、「自分が住む地域で感じていること」、「将来どのような地域であってほしいか」など、各地区全世帯にアンケート調査を行い、また、子どもたちにも集会（東子浦地区の協力）を開き、意見を集めることとした。

次に、これらの結果を地区ごとに地図やグラフにまとめ、それぞれの地区でミニWSを開催し、地区単位での地域づくりを考えることとした。ただし、ミニWSは最終的に入り江の3地区での地域づくりを行うことを前提としている。

そして、各地区での地域づくり案を持ちより、入り江全体の地域づくりに向けたWSを開催する予定である。

現在、ミニWSを各地区で数回行っているところであり、最終的な結果は得ていないが、アンケートや子どもたちのアイデアが刺激となって、地域づくりへの考えに変化がみられるようになってきている。しかし、反対に地区の格差は大きくなっているように感じられ、今後のWSではプログラムの修正が必要と思われる。

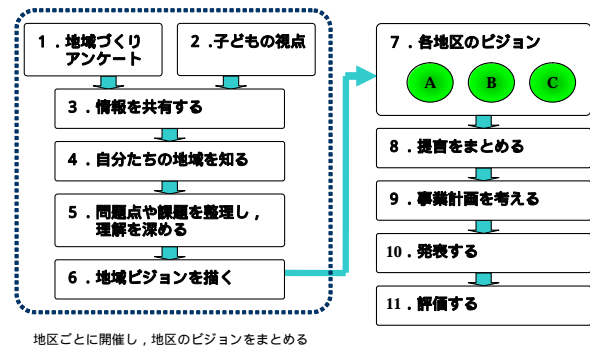


図-10 ワークショップ フロー図

5. おわりに

漁業地域において、集落単位で地域づくりを行うときには問題はないと思われるが、いくつかの集落が共同して「地域づくり」となると、集落の独自性から難しいところがある。この独自性が固有の文化を育ててきたが、

しかし、事前のアンケートや子どもたちの意見は、WSへ向けた良いウォーミングアップになったと思われる。

そして、ファシリテーターには、ねばり強さが必要である痛感させられた。

また、「地域づくりは人づくり⁶⁾」と言われるが、WSは人材の発掘の場とも成り得る可能性がある。

最終的な結論まで至っていないが、この報告が住民参加の漁業地域づくりの参考になれば幸いである。

参考文献

- 1) 宮口侗迪：地域を活かす - 過疎から多自然住居へ - ，大明堂，2003.
- 2) 日本建築学会編：まちづくり教科書 第1巻 まちづくりの方法，丸善株式会社，2004.
- 3) (財)地域活性化センター：まちづくりガイドブック，(財)地域活性化センター，2002.
- 4) 世田谷区まちづくりセンター：参加のデザイン道具箱，世田谷区まちづくりセンター，1993.
- 5) 中野民夫：ワークショップ - 新しい学びと創造の場 - ，岩波新書，2001.
- 6) 森巖夫・猪爪範子・岡崎昌之・宮口侗迪・西村幸夫：地域づくり読本 - 理論と実践 - ，ぎょうせい，1996.